ると丹波の貝野村へ這入つて參りましたが、このおもよさんは三ケ村を束ねする庄家さんの御娘御でなか〳〵大したもの、それが何うして大阪へ奉公に出たかといふと、行儀見習ひのために、甚平さんを頼んで大阪へ出ました、甚平さんも元は丹波の出であるところから、この庄家さんの勝手などは詳しいので、直ぐに門を這入つて、玄關まで走り込んで敷居を跨いで、ヤレ嬉しや、と氣がゆるんだものか、庭の眞ン中へドツシリと尻餅を揚いたまゝで「ウン、ウン——」といふばかり「ア、これ〳〵チョツト誰か來て下さらんか、庭の眞中へ妙な者が飛込んで來て、ウン〳〵唸つて居るが、息を切らして居るやうな……オヤ〳〵頭に草鞋が括つてあるぢやないか、ハテこれはてんかん病みか……兎も角、誰ぞ後へ廻つて、脊中をさすつてあげなされ、何處の人ぢやな……オウ——コレ、お前さんは大阪の甚平さんぢやないかの」「エツ、ア、……これは旦那さまでござりまするか、御機嫌宜しう……」「オウ、甚平さんか、まア何んといふ姿をしてやつて來たんぢや、サア〳〵此方へ上つて下されい……コレ〳〵甚平さんが御座つたのぢや、サアお蒲團を持つてお出でなされよ……サア、サアずつと上つて下され、ようまア來て下さつた、モウお前さんに逢へばな……コレ甚平さん、お前の顏、それ何うしたんぢや、飯粒だらけで、そんな顏を見ては可笑しいて、話しが出來ん、手拭を絞つて持つて來て上げなされ……サア其で拭きなされ、アノ甚平さんや、娘をば好いところへ奉公させて下さつたので歸つて來て、御主人の事を云ふて喜んでな、それに今度はまた婆アどんが病氣になつたので、勝手な事を云ふて、暇を取つて濟みません、お蔭でなア、娘が戻つて婆どんの介抱をすると、婆どんはズン〳〵善うなりました、ところが一ツ逃れてまた一ツ起つたといふのは、明くる日から、娘が病氣になりおつて、モウ彼是一ケ月になりますが、飯粒といふものは、一粒も食べおらん、山越への醫者を呼んで居りますが、テンでお醫者さんに病氣の原因が分らんのぢや、今朝もお醫者さんが仰しやるのに、明日の晩まで位しか生命はなからうと仰しやるので……」「エヽ、チョツト待つて下され、こりやマルで掛合ひぢやがな、實は大阪の若旦那といふのが斯々かふ云ふ譯で、明日の晩までに、此方のお孃さんを借つて歸らんと、若旦那のお命がないのでおます、どうぞ旦那さん、御主人の生命を助けるのでおますさかいに、お孃さんをお貸しを願ひとうこざります」「オウさうかい、アノ不束な娘を、それ程に思ふて下さるのかイヤ有難い、三日でも奉公をすれば、大切ない御主人ぢや、その御主人の生命に關る事なればお貸し申したい、けれどもな今云ふ通り、いつにも知れんといふ病人やでな、山越に大阪へは、却々行く事が出來ませんから……」「けども、旦那さま、ヒョツト御病人が、大阪やつたら行くと仰しやつたら……」「ウム其うぢや、病人が大阪へ行くといふ心持があるなら、そりや途中で死んでも、一向構はん、私しや本望ぢや、大阪へやります」「エーやりますか、本當にやるなア、いよ〳〵やるなア、そのやるといふた事を忘れるな——」「何んぢやい、氣味の惡い。えらい駄目を押すぢやないか、併し私しがやると云ふたらやりますで、娘は離座敷に寢て居りますから、靜かに彼